

# 「虫めづる姫君」〔堤中納言物語〕における敬語について

——感情の起伏と待遇表現との関連を中心に——

森 野 宗 明

## はじめに

「虫めづる姫君」という物語は、まことに興味深い作品である。貴族社会の規格からは完全にはみ出している女性をヒロインとして登場させるという素材面における特異性ばかりでなく、そうした特異な素材を物語化するにあたって、いかにもその内容にふさわしい、思い切った描き方をしているという、表現面における奇抜性に、ちょっと他に類を見ない工夫がみられるのである。

そうした表現面における奇抜性、特異性については、ヒロインの毛虫マニアである姫君の言動を中心に論ずれば、語彙部門を中心に、面白い事項が数多く拾い出し得、長大な論稿を作成するに足るものがあるのであるが、小稿では、待遇表現に焦点を絞って、従来、看過あるいは軽視されたままに過されてきている事項を取り上げ、論ずることにする。

## 被使用者の主人に対する待遇

### 一

ヒロイン姫君の、あまりにも規格はずれのエキセントリックとも評すべき言動にたまりかねた両親が、及び腰で意見をするのだが、姫君は泰然自若、恐縮、反省するどころか、逆にまことに理路整然とした反論を展開し、両親をして沈黙せしめる。そのやりとりを耳にしていた女房連、特に「若き」女房たちは、両親の意見に一縷の望みを託していたのであろう、さんざんな結果に落胆し、ある者は、消極的にこのような邸に奉公に出た我が身の不幸を嘆き、ある者は、日頃の抑圧されていた憤懣をとうとう爆発させてヒステリックに姫君に対する非難の声を大にする。この場面は、まことに面白いところであって、王朝貴族社会の規格から大きくはみ出し、周囲から疎外され孤立化している姫君の姿、エキセントリックな禁止言動がいかにも、当該社会の規格どおりの、平均的な女性たち、平凡な人間たちにとって、た

えがたく許容したがたいものであるかを、まことに鮮やかに描き上げた、一つの見所である。

なにはともあれ、まず、その場面の部分を次に引用しよう。

これ(Ⅱ大納言夫妻の意見失敗のいきさつ)を若き人々聞きて、「いみじくさかし給へど、心ちこそまどへ。この御あそびものよ。いかなる人、蝶めづる姫君につかまつらむ」とて、兵衛といふ人いかでわれとかむかたなくいでしがなかはむしながら見るわざはせじ

と言へば、小だいふといふ人、笑ひて

うらやまし花や蝶やといふめれどかはむしくさき世をも見るかななどいひて笑へば、「からしや。眉はしも、かは虫だちためり。さて齒ぐきは、皮のむけたるにやあらむ」とて、左近といふ人、

冬くれば衣たのもし寒くともかはむし多く見ゆるあたりは

「衣など著ずともあらなむかし」など言ひあへるを、とがくしき女聞きて、「若人たちは、何事言ひおはさうずるぞ。蝶めで給ふなる人も、もはらめでたうもおぼえず。けしからずこそおぼゆれ。さて又かはむしならべ、蝶と言ふ人ありなむやは。ただそれが蛸くるぞかし。そのほどを尋ねてし給ふぞかし。それこそ心深けれ。蝶はとらふれば、手にきりつきて、いとむつかしきものぞかし。又蝶はとらふれば、わらは病せさすなり。あなゆゝしともゆゝし」と言ふに、いとくさまさりて言ひあへり。(日本古典文学大系P371-378)

はじめのうちは、やれやれ、やっぱりだめか、という表情で、苦笑しながら、身の不幸、よくも調べもしないで奉公に出た不明を嘆くといった程度だったらしい。「小だいふ」とか「兵衛」とかの女房の発言はそれである。それがこぼしあっているうちに、だんだんエキサイ

トしてきたようである。「左近」の発言は、まさにその頂点にあるものであつて、ヒステリックな、抑えに抑えてきた憤懣が一度に爆発して、せきを切ったようにどつと罵詈雑言が飛び出したといったものである。

ヒステリックといったが、彼女の発言内に、姫君のことをあからさまに話題にしておりながら、まったく主人として、丁寧に待遇するといったところがなく、あたかも目下の人間を話題にのぼせる場合のように相応の敬語一切抜きで、罵倒しているという事実がそれを示している。「眉はしも……」「齒ぐきは……」は、当時一般の慣習であつた、眉を抜き、齒黒めをするといった女性のたしなみを完全に無視、軽蔑して、天然自然のまま澄ましている姫君の顔貌を評したものであるが、露骨に主人の顔貌をとにかく批判すること自体、上流社会に奉公に出た、とにかく女房とも呼ばれる人種としてはおしつけきわまることであるのみならず、まったく敬語を用いないで言及すること、ことがはなはだ異常なのであつて、エキサイトあまりヒステリックになつて、激しく流れる憎念をなんとも抑止できなくなつた結果の発言とみるほかはないのである。

「衣など著ずともあらなむかし」は、「ありなむかし」の誤字ではないかといわれている部分だが、終助詞「かし」が接続していることからみても、先行することばとしては、終助詞「なむ」は存疑であり、活用連語の「なむ」とみるのが無難であらうから、「あら」には疑問があるう。「あり」でも、「あら」でも、そのあるべき主体との関連からいえば、どちらでもよろしく、むしろ、「あら」の方が、実は面白いのだが、とにかく、誤字説を採り、「あり」に従おう。その場合、いま触れた、そのある主体であるが、従来の解釈では、奉仕し

ている女房ととれるようなとらえ方をしている気味があるが、「左近」の発言全体の調子、脈絡から推せば、主体は、姫君とみる方がよろしくはないか。姫君そのものに対する激越な非難という点で、それまでの「兵衛」とか「小だいふ」とかとはだいふ趣きを異にしており、発言の前半では姫君に対する露骨きわる罵言、後半は、「兵衛」なみの自嘲的苦笑的な口吻というのは、そうであつては絶対にいけないという、客観的な否定材料を提供するのは困難ではあるが、したがつて、まったくそのようにとらえ得る可能性がないとは言ひ切れないのではあるが、クライマックスに、わざわざヒステリカルな「左近」の発言が設けられているという点からして、すくなくとも、この場面に最適の解釈とは考えられない。やはり、前半同様、話題の主体、「あり」の主体は、姫君であると解するのが妥当ではないか。

つまり、「左近」の発言では、一貫して、まっとうから姫君が話題の中心として取り上げられ、被使用者らしからぬ、ぶしつけな待遇の仕方、すなわち、敬語は一切抜きで論じられ非難が浴せられているということになるのである。

さきほど触れたように、「あらなむかし」がそのまま認められるとするならば——その蓋然性は残念ながらはなだ低いものではあるけれども——、終助詞「なむ」の意味用法に照らして、問題なく発言者「左近」ではあり得ず、また一座の女房連でもおそらくなく、姫君が主体として志向されていることにならざるを得ない。そうであれば、なおさら、一貫しての激しい姫君への非難ということで、首尾がよろしく落着くわけである。

こうした「若き人々」の発言をきいて、一人だけ、姫君の肩を持つ女房が登場する。ただ、この女房、わざわざ「とがとがしき女」と性

「虫めづる姫君」(堤中納言物語)における敬語について(森野宗明)

格づけられており、やはり、理想的人物像からはもちろん、平均的な女性からほど遠い存在として登場させられており、そうした、同じく変屈な人物だけが擁護するという、そのことが、一段と、姫君の孤独、孤軍奮戦ぶりを示すものにはかならないわけで、この場面で、この「とがとがしき女」が顔を出すのも、その辺のところが緻密に計算された上のことなのであろう。もちろん、この女房の発言内では、姫君に対しては、被使用者としての分に応じた、失礼でない程度の敬語を使って待遇が行なわれている。

さて、この弁護がやぶ蛇になり、「左近」たちは、「いとどにくさまさりて」いっそう姫君のかげ口をたたくことになった。「にくさま」はやはり、姫君に対するものである。さもなければ、なぜ「いとど」を選んだのか、「まさりて」を選んだのか理解に苦しむことになるから。

## 二

だいぶ字数を費して、くどくどと「左近」の発言について述べ立てたが、これは、うっかりすると、敬語一切抜きの待遇ということが、現代的な感覚で受け取られ、軽く看過されてしまう懼れがあるからである。実際、従来の研究書類では、この場面での女房たちの発言が、日頃の抑圧されていた姫君への反撥、こうした奉仕生活の不満が、姫君のいないところで表面に現われ、激しい非難となったものだと評されているが、どうも、内容面に即してとらえられており、待遇のあり方といった表現面については、軽視あるいは看過されているきらいがあるのである。

現代では、待遇のあり方、待遇の表現が、すこぶる臨場的要素と深

「虫めづる姫君」(堤中納言物語)における敬語について(森野宗明)

く結びつき、その場面、場面のあり方、話し手によるとらえ方によって相対的に変動する。特に聞き手に対する顧慮が強く働き、話題の人物と話し手との関係いかによっても、そちらの方が卓越して、待遇決定に作用する。したがって、その人物が現場に居合わせ、広い意味での聞き手の一人として存在している、直接の相手ではなくても、つまり話し声が耳にはいるだろう聴取者の一人としてとらえられるような場面では、同輩どうしのプライベートな会話のやりとりにおいても、その人物が上長であれば、その人物を話題にのぼせる場合、相応の敬語を使って待遇をするであろう。しかし、その現場に居合わせないと、これはたいていの人間が経験していることであろうが、しばしば敬語を抜きにして、安直に取り上げるようになる。

もちろん、教養ある人間、作法を心得た人間としては、そのような臨場性のいかんにかかわらず、上長として高めて待遇すべき人物を話題にのぼせるような場合には、相応の敬語を使って言及すべきだという規範は、現代においても存在する。しかし、その規範の拘束力はかなり低下しているというのが実情であろう。特に無作法な人間のなかだけにみられるというようなものではなくて、相当広範にみられる傾向かと思われる。

したがって、単にうわさをする程度でもそうであるならば、悪口を言うといったような場合なら、なおさら、そうしたかたむきがあることになる。別にエキサイトしていなくても、敬語抜きという話題への取り上げ方が出てくるわけである。そうした現代の傾向に馴らされた感覚で、問題の「左近」の発言も軽く読みすごされてしまいはしないだろうかという懼れがあるのである。

そういう感覚で、この発言も読みすごすということであれば、その

読み方は、正しくない。作者の意図を汲み取らない無味乾燥な読み方というべきであろう。

### 三

待遇表現は、いわゆる絶対敬語の段階から相対敬語の段階へと推移し、現代では、完全な相対敬語への段階にはいつているといわれている。そうした絶対敬語から相対敬語への過程の途次において、平安時代がどのような位置を占めるのかについてもいろいろな論議が行われている。「虫めづる姫君」は、おそらく平安末あたりの作品なのであるが、その時代の待遇表現はどのような性格のものであったのだろうか。

平安時代といっても、我々がとにかく明らめ得るのは、貴族社会という限られた言語社会での範囲であるが、絶対敬語的な要素を色濃く保ちながら、相対敬語的な要素、臨場の要素がある程度作用し、場面による変動がみられるといった、明確にどちらとはきめつけがたい、過渡的性格のものであったと考えられる。

相対敬語の段階にはいつているとする説もあるが、そして、たしかに、場面による変動といった側面を強調して取り上げると、いま述べたように、相対敬語の観を呈するところがあるのではあるが、子細に観察してみると、その相対ということにはかなりの限定があり、現代のそれとははなはだしい懸隔があるのである。

たとえば、子が親を話題にのぼせる場合を取り上げてみよう。現代では、家族外の人物に対して、親のことについて語る場合は、敬語を使って言及するのは、聞き手に対して失礼な言い方であるから、敬語は使うべきではないとする規範意識があり、強い拘束力をもって、我

々の待遇の仕方を規制している。

平安時代でも、それと同じような規範が存したのではなからうかと思わせるような事例はある。「源氏物語」<sup>(1)</sup>「源氏物語」八常木Vの紀伊守が光源氏に向つて、父のことを話す場面などがその好例とならう。そこでは、父の行動の表現に一切敬語が用いられておらず、おさえて待遇しているのである。他人に対しては、親のことも敬語を使わずに言及する、その好例と目される所以であるが、ただ、ここで注意を促したいのは、それなら、他人に対する場合はいつもそうかというところではない、ということである。

敬語抜きでの待遇が与えられる場合は、聞き手が単に他人であればという条件が具備されていればよいというのではなくて、その聞き手が、話し手、話題の人物の親に比してずっと優位にあると評価される人物という状況裡で顕著に現われるのである。この点が現代のそれとは異なっている。聞き手への顧慮だけが作用して、話し手と話題の人物との関係把握がすっかり前面から後退するというのではなくて、聞き手への顧慮は、聞き手と話題の人物の親との関係の顧慮ともに行われるのであり、話題の人物への顧慮が強く働くという点で差異があるのである。

そこで、その親の地位がすこぶる高いような場合には、聞き手の方がその親よりも上位にあると判断されるような場合であっても、高い待遇をすることをおさえる程度で、聞き手への顧慮を表わし、敬語を使用しないところまではゆかないということにもなる。「源氏物語」八若菜上Vでの、夕霧が、父光源氏のことを、朱雀院に対して語る場面における発言がその適例である。

こうしたいで、一見、相対敬語ふうに見えるはするけれども、場

「虫めづる姫君」(堤中納言物語)における敬語について(森野宗明)

面性、つまり聞き手への顧慮がすべてに卓越するというのではなく、依然として、話題の人物への顧慮も強く働き、相対敬語が絶対敬語か、その待遇の性格の差異点が典型的な姿で顕現すると思われる、子が親を話題にするという場合を取り上げても、決して現代のそれとは同一ではないことが明らかになるのである。相対的敬語ではあっても、相対敬語というべき性質のものではないと考えるべきであらう。

被使用者が主人を話題にのぼせる場合は、子が親を話題にのぼせる場合以上に、現代の場合に比して距りが大きい。もっとも、ただいま引き合いに出した紀伊守が光源氏に父のことを話す場面と類似の事例がないわけではない。「源氏物語」八若菜Vにおける、幼い紫の上の乳母少納言が、紫の上の祖母尼君について、光源氏に語る場面に次のような部分がある。

問はせ給へる(尼君)は、今日をも過ぐしがたげなるさまにて、山寺にまかりわたる程にて。かう(アナタサマガ)問はせ給へるかしこまりは、この世ならでも、きこえせん。(日本古典文学大系P212)

主人尼君に対して、一切敬語抜きで待遇している。聞き手光源氏を中心にした人物関係把握であり、主人ではあるが尼君を自分がわに引きつけてとらえ、待遇しているわけで、場面性に大きく左右された事例として引用し得るものである。

しかし、こうした事例は、それほど豊富ではない。いや、それほどとは不適切で、むしろ、敬語を交えたかたちで待遇する方が普通であるというべきであらう。この少納言が尼君のことを光源氏に語るという場面でも、一方においては

過ぎ給ひぬる(尼君)も、世とともに(紫ノ上ノコトヲ)おぼし嘆

「虫めづる姫君」(堤中納言物語)における敬語について(森野宗明)

一四

きつるも……(大系P 214)

のように表現する場合の方が多く、こちらの方が常態になっているのである。

つまり、おのが主人よりも上位の人物を聞き手とするような場面においても、被使用者が雇用主を話題にのぼせる場合には、ときに聞き手中心のとらえ方が行われ、敬語抜きで待遇されることがあるにしても、とにかく敬語を交えたかたちで待遇し表現するというゆき方をとる方が普通なのである。

現代では、たとえば、官庁や会社など——特に都会におけるサービス部門のそれなど——では、部外者を聞き手とする場合には、話題の人物がおのが上長、雇用者であっても、さらに聞き手よりも上位にあると判断されるようなときでも部内者については敬語抜きで待遇し言及すべきである、そうした場面において、部内者でも上長だからという気持ちで、敬語を使うのは、聞き手に対して失礼であり、礼節正しい敬語の使い方とはいいたくない、とされている。——もっとも、現実には、これはかなりの心理的抵抗を生むようであるらしく、特にかたわらに当の上長、雇用主がいる場合など、しばしば話し手は当惑することになるようであるが。

とにかく、そうした現代の待遇の型と比べてみると、平安時代では、相似た点がないわけではないが、聞き手が、主人よりも優位にあることが明白であり、かつ、その懸隔がはなはだ大きいことも明白であるという条件がそなわっている場合において、ときに、現代と相似た現象が現われるという程度にとどまるものであって、大勢としては、話し手対話題の人物との関係、主従という支配従属の関係が中心になって場面が把握され、話題の人物に対する待遇が決定されるとい

う型に属するものであり、つまり絶対敬語型から本質的に抜け出すところまでは至っていないと考えるべきであろう。家族を話題にする場合以上に、絶対敬語の色彩が濃厚であり、質を異にすると考えなくてはならない。

相対敬語に絡ませて論じられる<sup>(3)</sup>、「源氏物語」(八東屋Vの、浮舟の母に対する「常陸殿」という呼称をめぐる問題についても、従者が、聞き手が匂宮一行であることをもかえりみず、主人浮舟の母を話題にのぼせるのに、「常陸殿」という尊敬表現を用いて待遇し、それが、ぶしつけな言動として、匂宮の従者たちの嘲笑を買い、「「殿こそあざやかなれ」と笑ひあへる」ことになったのだと解するのが唯一最善のとらえ方では、毛頭ないのであって、等しく「殿」呼称が適用される、被呼称者の幅の拡がり、そこにみられる落差の大きさという観点から論じるのが正しく、相対的とか絶対的とかから、切り離して十分扱い得るていのものである。主人に対して、敬語を用いたのが無作法であり、匂宮に対して失礼きわまる行為だからというので、「殿こそあざやかなれ」と匂宮の従者たちが「笑ひあへる」ことになったのではないのであろう。

#### 四

平安時代の待遇の型に相対敬語的要素を部分的に見出すことができるといっても、被使用者が雇用主を話題にのぼせる場合には、そのような面が稀薄であることは、以上のとおりである。そのような被使用者どうしのプライベートな対話という場面においても、事情は同じようなことであつたと思われる。

もちろん、そうはいっても、すべてがそうであり、どんな場合で

も、きちんと相應の敬語を用いて待遇するというわけではなかったかもしれない。敬語も用いず乱暴な口調で話すということもなかったわけではなからう。清少納言が

おほかたさし向かひても、なめきは、などかくいふらむとかたはらいまし。まいて、よき人などをさ申すはいみじうねたうさへあり。田舎びたる者などの、さあるは、をこにていとよし。男主<sup>おとしやう</sup>などなめくいふ、いとわるし。わが使ふ者などの「なにとおはする」

「のたまふ」などいふ、いとにくし。(古典全書「枕草子」P344)

と述べているのも、現実には、「なめき」取り上げ方、言い方をする人間もいたことを物語る。雇用主に対して乱暴な取り上げ方、待遇の仕方をする者もあつたのであらう。しかし、そうした者は、「田舎びたる」者として軽蔑され、「をこ」というレッテルがはられることになる。はなはだ無作法なふるまいであり無教養きわまりたいことになるのであつた。

したがつて、上流社会に奉仕するいっぽうの女房連ならば、そうした無作法な言動は深く慎しみ、無教養のレッテルをはられないよう行動するのが常態であつた。同じく、清少納言は、他を訪問した主人の供人たちが、なかなか主人が帰るような様子でないのにいらだつてぶつぶつ不平をもらすことがよくあることを述べ

いとむつかしかめれば、ながやかにうちあくびて、みそかと思ひていふらめど、「あな、わびし。煩惱苦惱かな。夜は夜中になりぬらむかし」といひたる。いみじう心づきなし。かのいふ者は、ともかくもおぼえず、このゐたる人(「主人」こそをかしと見えきこえつることも失するやうにおぼゆれ。(中略)「雨降りぬべし」などきこえづも、いとにくし。いとよき人の御供人などはさまなし。

君達などのほどはよろし。それより下れる際はみなさやうにぞある。……(古典全書P149-150)

と言っているが、興味深い。やはり主人に対してはぶしつけな言動についての感想である。これは男の場合であるけれども、「よき人」の彼使用者、「君達」のそれ、「それより下れる際」のそれといったごくおざっぱな区別は、女性の場合にもだいたいあてはまる。大納言家は、大臣家などに比べれば格が劣るけれども、それでもれっきとした上流社会のメンバーであることには変わりがない。一般にそのような家において、姫に直接奉仕する女房連としては、かげ口をたたくということはあり得ることだろうが、敬語を抜きで待遇するというようなことはあつてはならぬことであり、あるはずがないことと考へられていたに違いない。

上流社会のことばのしつけがきわめてきびしかったと思われることを示唆する事例として、次のような文章を引くことができる。村上帝の第八皇子永平親王が十二才ほどのときのことであつた。冷泉院の後の宮が養子にされようという話がおこつた。あるとき後の宮が病氣になられ、親王が見舞いに参上することになった。親王の後見、宰相済時が見舞いの口上を教えこんだ。その場面である。

「参りてはいかがいふべき」と宣はすれば、「御悩の由承りてなんとこそは申し給はめ」など教へられて参り給へれば、例の呼び入れ奉り給ふに、ありつる事をいとよく宣はすれば、宮悩ましう思せど、うつくしう思し召して、「さはのどかに又おはせよ」など聞えさせ給ふ。まかで給ひて、宰相に「ありつる事いとよく言ひつ」と宣へば、いであなしがましやと、いと心づきなう思して、「いかで言ひつとは申し給ふぞ。それはかたじけなき人を」と聞え給へ

「虫めづる姫君」(堤中納言物語)における敬語について(森野宗明)

ば、「おいおいさなりさなり」と宣ふ程、いたはり所なう心憂く見えさせ給ふを、わびしう思す程に……(古典全書「栄花物語」八月の宴VP193)

現前してはいないが、とにかく現に「後の宮」という高貴な人物「かたじけなき人」についての言及である。その人物に向って発言したということを表示するならば、単なる「言ふ」という、いわば中立的、あるいは軽くあしらう待遇的価値を表わすことになってしまいう言方を用いるのは不適切であり、当然「申す」「聞えさす」等の謙讓語が選ばなければならないのである。十二才といえ、もう、こうした規範にかなった正しいことば使いができなければならぬはず、たとい相手が親王であっても、いや親王だからこそおしつけは許されないものであって、あえてその非を直言したのである。済時は、当代きつてのうるさがたでありこうした礼儀作法にはやかましい人物であったという。それゆえに格別きびしかったともいえようが、きびしくしつけられ、一人前になれば、規範に合致したことば使いがきちんとできるようにしつけられるのが一般であったと考えてよろしかろう。

そうした上流社会に奉仕する女房連は、なおさら、そのようなしつけを受け、また奉仕先きで洗練され、規範におりのことば位に習熟しているのが普通だったのであろう。清少納言は他人に比して鋭敏にすぎたのかもしれないが、主人や上長に対する待遇の仕方といった点については、他の同じような地位の女房連も、おそらく等しい見解を持っていたとみるべきであらう。

## 五

そうしたことを示すように、被使用者が、雇用主を話題にする場合、まったく敬語抜きという待遇をしているような場面は、前述の「源氏物語」における少納言の発言の類を除くと、日記、物語には、管見の限り「虫めづる姫君」以外にはその例がないのである。物語には、ときに、主人に対して不平を抱き憎しみさえ抱いているといった被使用者が登場することがある。たとえば「落窪物語」における、中納言北の方に対する「あこぎ」の場合がそれであるが、そのような被使用者の発言ないし心話部においても、まったく敬語抜きで待遇するという事例はないのである。「あこぎ」と、その夫の帯刀という小者とのプライベートな、あけすけな対話の部分といった、もし、現代ふうな、臨場的要素が強く作用するような型であるなら、しばしば敬語抜きになる可能性のあり得る場面においても、とにかく、相応の敬語を用いて待遇する、内面はどうであれ、表面上はそれなりに丁寧な扱いをするというゆき方になっているのが常態なのである。「虫めづる姫君」の当該場面における、「兵衛」の発言内にみられるような取り上げ方、言及の仕方も同断であり、あのような待遇こそが常態なのである。

## 六

さて、さきほどから、場面性といい、臨場的要素といった類のことをしばしば使って説明してきたが、一口に臨場的要素ということをもって、その適用される範囲は、まことに広範であり、多様である。いままではそのうち、特に、場面構成要素としての聞き手の存在



が、どのように話し手の人物関係の把握に影響するかといった、その場その場における聞き手の話し手におよぼす作用、話し手が聞き手を中心にして、どのような人物関係の把握をし、話題の登場人物に対する待遇がどう変動するか、そこにポイントをしばって、臨場的、臨機応変のことを考えてきたのであった。

しかし、この他、その場その場における話し手の心理の起伏ということも、臨場的要素としては、やはり微妙に待遇の仕方に作用する。平静な心的状態にある場合と、はげしくエキサイトしている場合とは、必ずしも、待遇の仕方が同一ということにはならないと考えられる。もちろん、内奥において、どのようなにはげしい怒りや憎しみが燃えたぎっているとしても、それを抑圧し、すくなくとも、表面には現わさず、表向きは平静を装い、常規を逸脱していると受け取られないようにふるまうのが、教養豊かな人物の言動であり、たしなみということになるのであるが、ときに抑制しきれず、はたから、第三者の目で冷静にながめるならば、まことにほしくない、無作法な言動としか受け取れないような言動にはしるということが起こる。

このような意味における臨場性は、ときを超えて、つまり、昔だからとか、現代だからとかいった、その時代その時代の枠といったものにしばりつけられず、本能的なものとして作用する。王朝貴族社会の人士においても同断であり、現代に比して、たしなみとしてそうした激情を露呈し、それによって露骨な話し方に流されてしまうことを忌避すべきこととし、抑制することに馴らされていたという差異はあるにしても、ときに激情の爆発を防ぎ得ず、ヒステリカルな発言をするといったことは当然あったことであろう。

こうした側面からする臨場性は、文学作品では、ときに、特別の意

図を持ち、効果をあげることを狙って活用される。それは、表現面においては待遇ということだけに限らず、いろいろなかたちでうつし出されるが、特に待遇と絡みあわされておし出されることが多いようである。

日記、物語類において、当然丁寧な取り上げ方が期待されるような人物を話題に出しながら、まったく敬語抜きで待遇されるといった発言部は、それが、前述の「源氏物語」における「少納言」の尼君の取り上げ方といったように相応の理由のある場合を除いては、このような、その場における発言者の、異常ともいえる感情のたかぶりや密接に関連させられているのを原則とするようである。

その事例として、「源氏物語」八賢木Vの、弘徽殿太后が、父右大臣に向って、光源氏について激しく非難し、まくしたてるとしか形容のしようがないような口調で一氣にしゃべりとおす場面があげられる。

宮は、いとどしき御心なれば、いとものしき御気色にて、「帝と聞ゆれど、昔より、皆人、思ひおとし聞えて、致仕の大臣も、またなくかしづくひとつむすめを、このかみの、坊にておはするにはたてまつらで、弟の源氏にて、いときなきが元服の添臥に取りわき、また、この君をも、「宮仕へに」と心ざして侍りしに、をこがましかりし有様なりしを、誰も誰も、「あやし」とや思したりし。みな、かの御方にこそ、御心よせ侍るめりしを、その本意違ふさまにてこそは、かくてもさぶらひ給ふめれど、いとほしさに「いかで、さるかたにても、人に劣らぬさまにもてなし聞えむ。さばかり、ねたげなりし人の見る所もあり」とこそは、思ひ侍りつれど、忍びて、わが心に入る方に、なびき給ふにこそは侍らめ。斎院の御事

「虫めづる姫君」（堤中納言物語）における敬語について（森野宗明）

一八

は、まして、さもあらむ。何事につけても、おはやけの御方に、後やすからず見ゆるは、春宮の御世、心よせ異なる人なれば、ことわりになんあめる」と、すすくしうの給ひ続けるに、さすがに、

（右大臣へ）いとほしう、「など、きこえつることぞ」と思さるれば……（日本古典文学大系P412—413）

右大臣が、光源氏臘月夜密会の現場をおさえ、あわてて大后に告げるところである。光源氏の母のときからの因縁もあり、現在では、政治上の強力な敵であつて、日ごろから不快に思つていた光源氏が、こともあろうに大切な妹の臘月夜と密会した、しかも自分の邸内で、ということ、大后は怒り心頭に発り、はたからみたら、まことにほしたなく取り乱したとしか受け取りようのないような激しい口調で非難しはじめたのである。「いとどしき御心なれば、いともものしき御気色にて」「すすくしうの給ひ続けるに」と地の文で叙述されているその激しい口調は、まことに巧みに会話部の表現面で活写され、描写し尽されている。

その一つが、「みな、かの御方にこそ、御心よせ侍るめりしを……たびき給ふにこそは侍らめ。」という、それほど長くはないセンテンス内に、 $\wedge$ ——コソ……接続助詞V構造が三回もたて続けに現われるという特異な構文である。管見では、一つのセンテンスに、 $\wedge$ ——コソ——接続助詞V型の接続語を三回も含む構文は、「源氏物語」ではここだけであり、それ以外でも、ほぼ同時代までの作品にも見当らない。一般に、 $\wedge$ ——コソ——接続助詞Vで、いわゆる結びがながれるといわれている構文は、どちらかといえば、標準的な構文ではなく、センテンス中に一回ということならともかく——その程度の例はすくなくない——二回となると激減し、三回となるといま述べたようには

なはだ特異な例となる。そればかりでなく、二回以上現われる発言部においては、その発言者が、女御、后といったトップレベルの貴婦人、もつともつしみぶかく理想的な女性として描き上げられることが多い貴婦人であることも異常である。これは、まさに、弘徽殿大后が、「いとどしき御心」の所有者であり、ほかの部分でも、「いとどしちかどかしきところものしたまふ御方」（ $\wedge$ 桐壺V P 41）、「御心いちはやくて」（ $\wedge$ 賢本V P 37）と性格づけられている、その点と密接に関連しているものと思われる。ふだんはともかく、ひとたび激しい憤怒が渦巻き爆発すると、強い性格でうるおいに乏しい女性だけにおよそ高貴な女性らしくない、男のような口調で、一気にまくしたてる、そうした性格の持ち主、弘徽殿大后らしいイメージを、読者の脳裏に具象的に焼きつける、その表現手法がこの $\wedge$ ——コソ——接続助詞V構造の頻用なのである。 $\wedge$ ——コソ——結び。Vで終止することが期待されるようなところを、たて続けに三回も切らずに言い続けさせている口調であり、はなはだ標準的でない構文をこころみた理由は、それ以外に求めがたい。はたからはストップかけにくい激しい語調を感覚的に描きあげるのに効果をあげているわけで、この発言部の前後をはさむ、前引の地の文での説明とまことにしっくりと結びついているのである。この小論は、 $\wedge$ ——コソ——接続助詞V構造そのものを論じるのが目的ではないから、これ以上のことは別の機会で詳述することにして、とにかく、激しい口調がこれによってよく活写され、その激しさは、これも、トップレベルの貴族としては、「いと急にさがなくおはして」（ $\wedge$ 賢本V P 37）「のどめたる所おはせぬ」（同 P 41）右大臣でさえも「さすがに、いとほしう」べらべらしゃべってしまったことを後悔するほどのものであったことが描きられているのであ

る。

そうした激越な口調、理性を失い、憤怒に身を震わせているその姿と関連させて取り上げられるもう一つの表徴が光源氏に対する待遇である。みられるとおり、光源氏および光源氏方の人物については敬語抜きで扱っている。わずかに、「御方」にそれらしきものが感ぜられる程度であり、まったくといってよいほど敬語が用いられていない。

王上琢弥氏（「源氏物語評釈」）は、「大将（光源氏）は敵方の人だから」敬語が使用されないのといわれている。しかし、一気にまくしたてたあと心中ひそかに光源氏追放の策をめぐらす心話部では

つつむ所なく、さて、いりものせらるらんは、殊実に、かるめ弄せらるるにこそは（同 P 414）

と、光源氏の行為の表現については、とにかく、きちんと、尊敬語が使用されているのである。「いとどしき御心なれば、いとものしき御気色にて」「すくすくしうの給ひ続」け、さすがの右大臣でさえもが「さすがに、いとほしう」「思さ」れたほどに激越な口調であった発言内のみ、まったくといっていいほど敬語を用いてない点に注目すべきであろう。単に、光源氏が太后にとって敵方であるからということだけであるならば、心話部においても、敬語抜きになるべきはずであらう。

敵方であるということ、したがって、不快に思っているということ、微妙に待遇の仕方に作用することはあるであろうが、あからさまに敬語抜きというかたちで顕現するためには、やはり、その場に臨んで、冷静を失い、異常にエキサイトしているという、平常とは異なる心的状態におかれているという状況との関連が重視されなくてはならない。敵方であり不快な気持ちを抱いているということは、常に、敬

語抜きで待遇しようという方向に向いやすい素地を作っているが、その力は潜在的なものであり、それがはっきりと顕現するためには、さらに別の要因が介在することが必要なのである。不快の念を抱いているからといって、一世の源氏であり大将であるトップの貴族を、敬語抜きで待遇するというのは、女御后クラスの貴婦人としては、はしたないことのはずである。やはり、ヒステリカルな心的状態ということとの関連において解すべきであらう。

## 七

もう一つ、同趣と解せられる事例を挙げよう。時代が少しく下るが、「平治物語」にみられるものである。平治の乱の首謀者、権中納言右衛門督信頼に対する源義朝の言動がそれである。義朝は武門で官職もわずかに左馬頭、貴族の信頼とは、身分上の懸隔が大きい。当初、信頼に誘われたあたりのところでは、そうしたずっと劣った地位の者としてとるべき態度に適合した言動で信頼に接し、「命を捨る事なり共たのまれたてまつるべし」（日本古典文学大系 P 189）「保元に一門兄弟失ひはてて兄一身に成て候へば、平家もいぶせく存候。よく候べき」（同 P 189-194）のように、まことに丁重に応接している。ところが、いざ合戦となつて敗色濃厚になると、官位ばかりは高いけれども、何の働きもできない信頼が足手まといになり、利用価値もなくなるようになると、がらりとその態度が変化し、特に信頼が義朝をなじるような言を吐くところでは、激怒して、口ぎたなく罵倒し、鞭で打つ。

義朝宣ひけるは、「信頼はとくにおちぬれば、遙にのびたるらん。いづくにかあららん」と宣ふ処に、（中略）八瀬の松原にて（信

「虫めづる姫君」(堤中納言物語)における敬語について(森野宗明)

二〇

頼か)義朝に追付給へり。ややと呼声のしければ、何者やらんとまつところに、信頼追付て「もし軍にまけて東国へおちん時は、信頼をもつてゆかんとこそ宣ひしか。心がはりや。」といひければ、義朝はらをすへかねて、「日本一の不覚仁。かゝる大事をおもひ立て、我身も損じ、人をもうしなはんとするに、にくひ男かな」とて、大の鞭をぬきいだし、信頼の弓手のほうさきをしたゝかにこそうたれけれ。(同 P241)

「保元物語」「平治物語」における義朝の人物造型をみると、短気で心的起伏の激しい、いくさは強いが、政治家向きではない人物として描かれている。息子の頼朝とはタイプの異なる人物として描かれている。この場面は、そうした彼の性格を鮮明に形象化したところで、人物描写、場面描写としては、この物語での白眉といつてよろしい。「はらをすへかねて」とさりげなく筆をおさえているが、あとに続く発言、鞭で打ったという行動に、多くの言辭を費す以上の効力が發揮されているのである。

貴族と異なり、奔放、粗野な武人であるという点での差はありはするが、やはり、心的状態と待遇とが絡まりあつた事例として注目すべきところであろう。

## 八

ここで話を「虫めづる姫君」に戻そう。やや冗漫の憾があるほどに、他の事例を引き、待遇の型のありようを論じてきたが、従来、この方面については、つつこんだ研究が進められていないからであつた。「右近」の姫君に対する非難の發言も、如上のことがらを背景としてとらえるべきである。エキサイトした心的状態との関連裏におい

てとらえることが必要である。さもなければ、あのような特異な待遇が行われている事情を説明するのは困難であろう。誤字とか、消極的に逃げる手もあるが、正面きつて積極的にうけとめ、相応の理由づけを行うことが可能であるならば、やはり積極的に取り組むべきであろう。

心の通い合うべき侍女から、いかにプライベートルな場でのかけ口とはいえ、あからさまに暴言を加えられているという、その事実によつて、はじめに述べたような、貴族社会から疎外され、まったく孤立している姫の姿、それはどこにはなはだしい彼女の言動の特異性、そういったものがみごとに描きあげられていることになるのである。その社会の平均的常識的人間として登場させられた、姫君を圍繞する侍女との間にコミュニケーションが成立しない、断絶した存在である姫の姿がみごとに浮きぼりされることになるのである。この場面の直前に、両親の心話部があるが、そこでは、「いとあやしくさまことにおはすこそ」(P27)等、敬語を使って姫が待遇されている。規格はずれであつても大切な娘である。肉親というつながりからして当然の待遇といえようが、それとの対比において、なおさら、「右近」の發言の激しさ、それによつて象徴させられている姫の、所属社会からの隔絶の大きさが感じられるのである。

管見では、類似の事例、つまり被使用者対主人という関係での例はこの例のみであることを思うと、まことに思い切つた描写法を採つたもので特異な素材の物語化には、ふさわしい手段といえよう。感情が抑制できなかったという意味では「左近」のいたらなさ、はしたなさが非難されてしかるべきであるが、それ以上に、抑圧できないほど、憤怒が激しかったこと、それほどの憤激を侍女たちから買うほど、姫

君の言動が特異であつたことの方を重視すべきであらう。作者の、この場面設定の意図もそこにあるのであらう。

注1 日本古典文学大系P 92 参照、「わたくしの主とこそ思ひて侍るめるを……」

注2 日本古典文学大系P 216。かなり長い発言だが、光源氏に対する敬語は「うちかすめ申さるる」「なげき申し給ふ」のように軽い。

注3 日本古典文学大系P 162-163。「常陸殿のまかでさせ給ふ」が問題の発言。石坂正藏博士がこの箇所を取り上げ、相對敬語という観点から論じられている。「古典解釈と敬語法」(「講座解釈と文法」—明治書院—総論篇のP 148以下)参照。それに対する筆者の見解は、「源氏物語における敬語」(「国文学解釈と教材の研究」昭和四一・七月臨時増刊号)でくわしく論じてある。

注4 日本古典文学大系P 118・119など参照。「—給ふ」クラスの敬語は用いている。

注5 この問題に関しては、口述では、昭和四二・九月、東京教育大國語国文学会、昭和四二年度研究発表会で、「源氏物語・賢木の巻末尾の弘徽殿大後の発言部の分析」と題して発表してある。

なお、客観的な、社会的地位の高下といった基本だけで待遇が決定されるわけではなく、それ以上の要因が微妙に影響するという点については、論じるべき問題が多々ある。論を組み立てる上での貴重な資料も少くはない。利害得失にからむ心理が作用することを示すような事例もあり、平安時代や鎌倉時代における待遇の実態については、なお今後の解明に残された部分が多いのである。

補 「虫めづる姫君」の当該箇所引用文は、日本古典文学大系の文章をそのまま引いたものである。したがって、読み方については、筆者の見解が反映しているものではない。「兵衛」の和歌の部分など、従来諸説が並立し、有疑とされているところで、引用文の読み方にも問題があるが、小論の直接かわるところではないので、そのまま手を加えなかった。

## 地の文における姫君に対する待遇

次に、解釈上の問題を取り上げよう。地の文における、姫君に対する敬語の使用で、従来問題にされているところに、次の箇所がある。

かはむしは毛などはをかしげなれど、おぼえねばさうざうしとて、いぼじり、かたつぶりなどを取り集めて、歌ひののしらせて聞かせ給ひて、我も声をうちあげて、「かたつぶりのつの、あらそふやなぞ」といふことをうち誦じ給ふ。(P 378-379)

傍線部の「せ」を尊敬語とみるか、使役とみるかが問題になるわけである。一般に、平安末あたりまででは、「聞く」動作の最高尊敬表現としては、「聞し召す」を使う方が常態であり、分析的に「聞く+尊敬語V」という構成で表現することはすくない。つまり、「聞かせ給ふ」を用いることはすくないのである。分析的な表現は、次位の尊敬表現の場合にとられるのが常態なのである。

こも、「聞しめして」とあれば、「せ」云々の問題も、当然おこるはずもないところである。しかし、「聞かせ給ひて」である以上、たしかに、尊敬か使役かは問題になる。

どちらかに決着をつける手段としては、姫君に対する地の文での敬語の使い方がどうであるかを調べ、大勢に準じてこも処理するといふことが考えられる。その線から調べてゆくと、尊敬表現としては、この箇所を除くと、一貫して次位クラスの敬語が使用されていることが明らかになる。引用文の末尾の「誦じ給ふ」式の言い方なのである。尊敬動詞の場合をみても、「おぼす」「のたまふ」「おはす」クラスなのである。

「虫めづる姫君」(堤中納言物語)における敬語について(森野宗明)

二二

ただ一つ、「さまざまなる籠箱どもに入れさせ給ふ」(P.376)がひっかかるが、これも問題箇所同様、使役か尊敬かが問題になるところで、明白に尊敬の例として決定されるところではない。こうした「いせ(させ)給ふ」では、明白に使役と解すべき例は存するが——P.382の「かはむしのしりてはらひ落させ給ふ」は、場面からして、使役と解さざるを得ない、すくなくともそう解す方がはるかにしぜんなところ——、その逆の場合はない。

一般に、最高敬語と次位敬語とが同一人物に対して、特別な場面的な事由からではなく、混用されるという事例は、それほどめずらしくはない。しかし、最高敬語のなかに、次位敬語が散発するという現われ方するのが普通であって、その逆は稀である。その意味からすると、「せ」が問題になる場合、尊敬とみても文意が通じる、通じると思われるようなところであっても、使役として十分解し得るならば、そちらを優位に立てるべきであろう。

この場面では、使役に見るとして、被使役者が誰あるいは何なのかに懸念を持たれ、尊敬とみると、いま述べたような大勢からはそれてしまうが、文意は通じやすいと考えられがちなのが問題の生じる理由かと思われる。使役とする場合、「侍女たちにもお聞かせになつて」(佐伯梅友博士ほか著「堤中納言物語新解」——明治書院——)と、侍女とみるのが有力であるが、この場面、姫と、虫あつめの手足となる男童とが中心となって構成されているところであり、侍女たちを引き出すところに、若干の唐突の感が抱かれることになるのであろう。

しかし、これはあくまで感じの域を出ないものであり、不自然というほどのことはなからう。筆者も、従来の説のうちでは、この説を最良と考える。

ただ、使役としても、これだけが成立し得る解釈ではあるまい。突飛と思われるだろうことを承知で、被使役者、聞かされる相手を虫とみたらどうかという考えを出してみたい。この場面は、この物語のストーリーの展開からすると不可欠の部分ではない。あくまでも手虫に興じる異様な姫君の姿を、まず読者の脳裏に刻明に印象づけようとする狙いで設定された部分であり、本格的なストーリーの展開は、この後の「有馬の助」の登場をまって始まるのである。この部分までは、やや冗長と思われるほどの前置きの部分であり、姫の破格ぶりなことさらに強調して、読者に印象づけようという、いわばヒロイン解説の役割りをはたすところである。

そこで、姫の異常ぶりがオーバーに描きあげられているのであるが、「聞かせ給ひて」もその線からとられないだろうか。自分が聞いたり、侍女たちに聞かせたりでは、ありきたりであり、異常ぶりの強調という点では平凡にすぎる。客観的にはナンセンスとみられる行動であっても、姫にとっては大切な相手である虫に向つて、あたかも人間に接するように接し、虫に聞かせてやるために「歌ひののしらせ」ているのであるとみることになつて、いふなればけたはずれの虫キチぶりが遺憾なく発揮されることになるのではなからうか。虫のうごめくのも、彼女にとってはあるいは、その歌を解しての反応とみえるのかしれない。そこでそうした姿をみているうちに彼女自身が興奮し、ついついみずからも、姫君らしくもなく、大声で詩など「うち誦」ずるといふあられもない行動をしてしまう……というのが、この場面ならではのなからうか。

とにかく、「せ」は使役とする方が無難であろう。使役とすれば、という点で、思いきつた解釈をこころみたわけである。

## 二

もっとも、実は、この部分そのものについては筆者は、さほど大きな関心を持ちあわせてはいない。すでに、使役とする説がちゃんと出されているからである。筆者が取り上げたいのは、次の箇所である。

右馬の助たちがこっそり大納言邸内に侵入し、虫に夢中の姫のうわさにたがわぬ様子を盗み見た。それに気がついた、おとなと思われる「たいふの君」——「君」呼称に注意——が、あわてて、知らせに姫の部屋に向う。そのところである。

このたいふの君という、「あないみじ。御前には、例の、虫興じ給ふとて、あらはにやおはすらむ。告げたてまつらむ」とて参れば、例の、簾の外におはして、かはむしのしりてはらひ落させ給ふ。いと恐ろしければ、近くはよらで、「入らせ給へ。はしあらはなり」と聞えさすれば……(P 382)

「聞えさす」は、謙讓表現における最高敬語である。十一世紀もはじめごろまでは、もっぱら口頭語としてのみ用いられ、まだ、文章語としては使用されるまでに至らなかったらしい。「宇津保物語」等から、「蜻蛉日記」あたりをみても、その用例は、ごくわずかの存疑例を除いては、会話部、消息部に集中している。おそらく、俗語臭をまだ残し、標準的な用語としては受け入れられなかったものなのであろう。地の文でも使用されるようになるのは「源氏物語」のあたりからである。地の文で使用されるようになったのは比較的新しいことなのである。その地の文での用い方は、会話部に比して一段と、被適用対象が限定されており、主従関係にあるような場合を除いては、トップレベルの貴族に限られている。一般に、大納言家レベルの姫君には適

用されることはめずらしい。

そうした一般的な趨勢からしても、この箇所は、最高敬語の「聞えさす」とすると落ち着かないのである。加えるに、さきほど述べた、この物語内での地の文の待遇が次位敬語レベルだということがある。謙讓表現も同断で、「言う」動作の場合では「聞ゆ」が用いられている。たとえば、P 382では、同じく侍女たちが姫に「言う」ところに「聞ゆ」が用いられている。

ただ一つ、この場面が続いて、知らせを聞いた姫が本当にせず、男童をやつて見させたところ、その童がはせ帰つて

「まことに侍るなりけり」と申せば(P 382)というところがある。「申す」は、「聞ゆ」に比して、硬く改まった言い方であるが、その改まったところが、そこで、しばしば「聞えさす」と同じように、程度の高い敬語として用いられる因になるのであるが、こゝは、敬意の度合いという角度からよりは、改まった言い方という角度からとらえればよろしいのであろう。敬意の度合いということからでも、「たいふの君」に比して、男童は、さらに一段と劣る地位の使用人であり、そうしたはなはだしくかけ離れた主従関係にあることから用いられたものとも解し得るが、同じような、男童が姫に「言う」場面でも、うちとけた、虫集めに興じているところでは

「これ御覧せよ」とて、簾をひきあげて、「いとおもしろきかは虫こそ候へ」といへば……(P 381)

のように表現されているのであり、妙にかしこまり、改まって、つまり神妙な顔つきで、言上しているという気持ちで「申す」が用いられたものと解してよろしかろう。

そこで、この「聞えさす」は、さきほどの「―せ給ふ」同様、問題

「虫めづる姫君」(堤中納言物語)における敬語について(森野宗明)

になるはずのところとなるのである。従来は、しかし、この箇所については論議されず、謙讓表現として処理するのが通説になっている。

筆者は、「―せ給ふ」同様、△聞え+さす√に分析し、「さす」は使役と解すべきことを主張する。改めて言うまでもないことだが、「聞えさす」は、いつも全体で謙讓という場合ばかりではなく、右のように分析される「聞えさす」もある。この場合もそれであると考える。

この解釈を支持する徴証は、なにも、地の文における敬語の使用一般だけではない。「いと恐ろしければ近くはよらで」とあるところが注意をひく。姫が室内の奥にいるならともかく、「簾の外におは」する状態である。そしてさかんに虫を落させ騒いでいる。そのそばまではこわくていけないのである。だからといって大声をあげるわけにもゆかない。大声をあげるのが女性として、はしたない行動であるばかりでなく、すぐそばの外には、例の怪しい男たちが立って様子を窺っているからである。心はせくのだが、窮余の策として、とっさに彼女は、その室内のだれかをして「聞えさ」せたのではなからうか。その誰かは、いやいやながら、つとめとしてはしょうがなく、室内のすみにもひかえていた侍女たちの一人とみればよろしかろう。

虫に夢中で、あられもなく「簾の外」に出てしまった姫、気味の悪い毛虫、こわくて近寄れない、頭かぶの女房、その場面が如実に活写されているが、「聞ゆ」ではなく、△聞え+使役さす√の「聞えさす」を用いたことが巧みに効果をあげている。

こうみると、地の文一般の大勢にも合致し、場面の描写にも合致し、すべて落ち着くと思うのであるがいかであろう。